

女子スポーツの普及と発展 ～女子野球に着目して～

太成学院大学 長谷川ゼミ 2
山家大輝 西村晃佑 松田雅季 宝納春輝

1. 緒言

女子軟式野球クラブの歴史は戦後に始まるが、今に続く体制で運営されるようになったのは 88 年の関東女子軟式野球連盟の設立からだ。

関女連には当初から小学生から大人までたくさんのチームが加盟し、学校や職場で野球を続けられない女子選手の受け皿になってきた。現在は関女連を含む全国 11 の連盟や支部を全日本女子軟式野球連盟が束ね、09 年現在、一般チーム 70、中学生チーム 6、高校生チーム 6 という大きな組織に成長している。

女子硬式野球が本格的に始動したのは 97 年のこと。すでに定着していた女子軟式野球とは関係なく、中国や韓国の女子硬式チームとの親善試合のために、全国高等学校女子硬式野球連盟が発足したことに始まる。

女子硬式野球部の特徴は、たった 6 校しかない分、どのチームも全国から選手が集まっているということだ。男子の野球留学と同じ図式だが、大きく違うのは「野球を続けたいからこの学校を選んだ」ということ。連盟のホームページには「野球が大好き！」「野球を続けたい！」という高校生たちの熱いメッセージが躍り、見る人を元気づけるが、裏を返せばそれは、地元では満足に野球を続けられない女子高校生たちの悲しい現実を物語っている。

2. 現状

日本における女性のスポーツへの参加は、急激な発展を遂げてきた。1970 年以降スポーツの大衆化により、女性が参加できる種目が大幅に増加したことが要因である。特に女子サッカーのなでしこジャパンが 2011 年に開催されたドイツ女子 W 杯で優勝し、さらに 2012 年に開催されたロンドンオリンピックでも銀メダルを獲得したことで、女子サッカーの人気は増幅している。

日本における女子野球の現状は、競技人口の面から見ると、日本女子野球連盟に所属している全国高等学校女子硬式野球連盟、大学・一般クラブチーム、全日本女子軟式野球連盟、全国大学女子野球連盟、日本女子プロ野球機構の合計で約 160 チーム、約 3,000 人という状況である。一方、女子サッカーの競技人口は、女子チームに登録している選手だけで 27,169、チーム数は女子チームのみで 1,235 チームとなっている。

最後に日本代表女子野球チームの国際大会で大きな成績を見てみよう。2004 年から国際野球連盟(IBAF)が主催する女子野球のワールドカップが開催されている。第 1 回、第 2 回大会は、いずれも米国が優勝し日本は準優勝で、あったが、2008 年に日本で開催された第

3回大会から2016年にカナダで開催された第5回大会まで5大会連続して優勝している。だがしかし、結果を残しているにも関わらずいまだに女子野球は、競技人口も少なく、認知度も低いと言える。

今回の5連覇もおそらくはほとんどの人がしらなかったのではないだろうか。

開催年	大会名	開催国	成績
2001年	第1回女子野球世界選手権	カナダ	2位
2002年	第2回女子野球世界選手権	アメリカ	2位
2003年	第3回女子野球世界選手権	オーストラリア	優勝
2004年	第4回女子野球世界選手権	日本	優勝
2004年	第1回IBAF女子W杯	カナダ	2位
2006年	第2回IBAF女子W杯	台湾	2位
2008年	第3回IBAF女子W杯	日本	優勝
2010年	第4回IBAF女子W杯	ベネズエラ	優勝
2012年	第5回IBAF女子W杯	カナダ	優勝
2014年	第6回IBAF女子W杯	日本	優勝
2016年	第7回IBAF女子W杯	韓国	優勝

日本女子野球協会等の資料より作成

3. 提言

サッカーのユース制度を女子野球に取り入れる

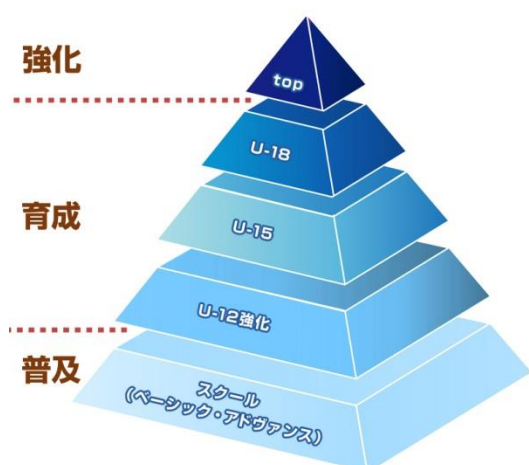
現在の女子野球にはクラブチームはあるが、ユースチームは存在しない。クラブチームではユースのように次の学年、進学で競技の環境が整備されておらず競技を続けられない可能性が出てくる。それにより、中学、高校に進学する際に競技をやめてしまう人が出てきてしまう。

一方、サッカーでは、プロ選手の育成のために長期的視野に渡った選手の育成をめざしており、一人の選手が自立期においていかに大きく成長するのかを第一の目的とし、課題を吸収しやすい時期としにくい時期がある、最も吸収しやすい時期にその課題を与えていくことが、その選手を最終的に一番大きく成長させることにつながる。これがユース育成をする中で、非常に重要な考え方だ。

そこで私たちは女子野球の発展のためにサッカーのようなユース制度を提言する。

4. ユースとは

サッカーなどで取り入れられている長期一貫システムのことである。基本はピラミッド型のシステムとなっており、一番下の年ではスクールになり、ここではサッカーの普及を目指している。次の U-12 であるジュニア、U-15 であるジュニアユース、U-18 であるユースでプロになるために育成に力を入れている。ユースではこのように環境や整備が整っており、プロへの道が明確になり選手の大きな目標となる。



5. ユース制度の効果

ユースにすることにより、メリットがいくつかあげられる

- ① 長期一貫指導システムが行える
- ② 女子野球を続けてもらえる
- ③ プロ選手への道が明確になる

参考文献

がんばれ女子野球 <http://girls-bb.com/>

横浜 FC オフィシャルホームページ <http://www.yokohamafc.com/academy/vision>

日本女子野球協会 <http://www.wbfj.jp/>